

子育て・子育て支援のネットワークと保育所の役割

＜大分県日田市＞社会福祉法人 大鶴福祉会白毫保育園 副園長 鋤 柄 洋 嘉

Ⅰ. はじめに

近年、少子高齢化、核家族化、都市部に人口が集中し地方の過疎化が進むなど、人口構造の急激な変動や女性の社会参加の増加などによる社会環境の変化は、子どもの育ちと子育てに様々な影響を及ぼし、子育て・子育てを社会が支援する必要が生じている。

保育所は、地域の多様なニーズを抱えた子どもとその保護者が利用しており、幅広い対象を理解し、適切な支援を行うことが求められている。このような社会的要請に応えるためには、保育所単独ではなく、地域にネットワークを構築し、連携することが必要であり、一般的な子育て支援から障がい・要支援家庭まで、幅広い範囲を支援するためのネットワークの構築・活用が、保育所の大きな使命の一つとなっている。

本研究の目的は、子育て・子育て支援のネットワークの構築と活用に保育所が果たす役割を明らかにすることにある。方法として、本園における地域実践を整理して職員の意識調査を行い、その成果と課題を分析する。これによって、子どもや保護者が安心して過ごせる子育て支援に、保育所が果たす役割を検証する。さらに個人と職員間の自己評価を踏まえて、新たに取り組むべき子育て支援を明らかにした。

Ⅱ. 職員の意識調査

1. 調査の目的と方法

子育て不安や児童虐待の対応など、子どもと子育て家庭への支援は、地域社会を基盤として多面的に取り組みを充実していくことが大切であり、

保育所はさまざまな機関・組織・団体や地域住民と連携・協働して地域の保育機能を高めるための中心的存在であるべきと考える。連携が効果を発揮するためには多様な取り組みと、これに対する職員の意識が重要である。このため、本園で行っている子育て支援の実践について、取り組み内容を整理し、それぞれについて職員がどのような意識をもっているかを明らかにするために調査を行った。

方法としては、職員 13 名にヒアリングを行った。調査実施時期は 2012 年 11 月である。内容は、本園の子育て支援であり、具体的には表 1 のとおりである。倫理的配慮として、個人が特定されないよう配慮した。

2. 調査結果

－子育て支援の成果と課題－

本園の子育て支援の概要、及び意識調査の結果を成果・課題に分けて整理したものが「表 1 子育て支援事業の概要等」である。地域を基盤とした子育て支援・園を基盤とした子育て支援・障がい・要支援家庭への子育て支援と多様な支援に取り組んでいるが、いずれの支援も関連性があり、多面的に関係を持つことで、各関係者との相互理解や柔軟な対応を可能にしていることがわかった。つまり、多面的に取り組んでいることが、ネットワークの強化につながり、個別の支援の効果を高めていると言える。

Ⅲ. 意識調査を反映した改善の取り組み

この調査結果を日々の取り組みに反映させるこ

とを目的として、職員間で、①個人の自己評価、②職員全体の話し合い、③改善策としての新たな取り組みを行なった。その詳細は下記の通りである。

① 面接を通した職員一人ひとりへのフィードバック

本園で行っている保育実践は、決して珍しいものではなく、多くの園でも取り組まれていることと思われる。つまり、保育所は意識せずとも既に他機関と「子育て・子育て支援のネットワークの構築」ができている施設と言える。しかし、保育士をはじめとするスタッフが、どれだけこのこと

表1 子育て支援事業の概要等

	取り組み	概 要	成 果	課 題
地域を基盤とした子育て支援	小学校との連携（①交流会の実施）（②行事への参加）（③教諭の園訪問）	①1年生とスタンプラリー形式で校内を見学する。 ②力士が園に来て触れ合い遊び。小学校の土俵で力士と取り組み。 ③就学予定の学校教諭が園に来て、気になることなどを確認し合う。	①就学への期待と安心感。 ②国技を知る機会。 ③要録では伝えきれない部分まで伝えられ、気になることを直接見ることができる。	①入学時に5・6年生になる児童との交流会の方が良いのではないかと。 ②事前に相撲の知識を勉強しておく、さらに興味がわくのではないかと。 ③口頭で伝えているので、要録が蔑ろにされやすい。
	公民館との連携	青少年学習事業への協力。小学校高学年が園に来て園児と触れ合い遊びを行う。	・異年齢児交流の機会。 ・子ども社会のルールを知る機会。 ・就学へ期待や憧れ。	・公民館主催なので園の思いが反映しにくい。 ・単に子ども同士で遊んでいるだけなので、内容を充実させるべき。
	老人福祉施設・老人クラブとの連携	年3～4回、交流会を実施。	・核家族が増える中、老人と触れ合う機会。（世代間交流） ・人を慈しみ、思いやりの心などを育てる。 ・参加者（高齢者）の方にとっても喜んでもらえる。	・回数、時間が少ないので、心を育てるまでには至らない。 ・伝承遊びなどをもっと教えてもらう機会にするべき。 ・参加できていない地域の高齢者の方への対応。
	他園との連携（①交流会の実施）（②合同研修会の実施）	①姉妹園との交流会を年2回実施。 ②月に1回、市内の園から担当者を派遣し、主任や園長を交えて合同研修会を実施。	①同年代の子どもたちと触れ合う機会。川遊びなど、普段できない遊びを体験できる。 ②他園の実情や情報を知ることができ、互いに切磋琢磨できる。	①子ども同士の関わりを充実させる内容にするために、計画・立案を両園共同ですべき。 ②日程、会場、予算など、調整が困難。
	JA・農家との連携（芋掘り・ぶどう狩り）	J A 青年部の招待で芋掘り体験の実施。地元ぶどう園でぶどう狩り体験。	・食べ物旬を知ることできる。 ・地元の特産物や産業を知ることができる。 ・収穫の喜びを感じられる。 ・農家の人からいろいろな話が聞ける。	・苗植えや世話などができず、成長過程を知ることができない。 ・以上児のみの活動で未満児は体験できない。
園を基盤とした子育て支援	季節行事の実施（子どもの日・もちつき・ハロウィン・クリスマス・節分・ひな祭り）	行事に祖父母や民生児童委員を呼び参加してもらう。また、近隣住民宅を訪問する。	・日本の伝統行事や節句の意味を知る機会。 ・他国の文化に触れる機会。 ・近隣住民とのコミュニケーションの向上。 ・園のことを知ってもらう機会。	・訪問先の範囲を広げたらどうか。 ・祖父母の世代でも餅の扱い方を知らない人が増えてきた。 ・民生委員さんとの触れ合いの時間をもっと増やすべき。
	園解放の実施	子育て家庭に園を開放。育児相談などにも対応する。	・園に興味のある人に体験をしてもらう機会。 ・育児不安の解消などにつながる。	・周知の仕方が悪く、利用者数が少ない。

障がい・要支援家庭への子育て支援	保健師との連携	定期健診時の情報の共有。専門機関を含めたケース会議の実施。	・障がいなどの早期発見・早期治療（療育）の実現。	・個人情報保護や保護者の了承など、情報共有への問題が多い。 ・気になる家庭ほど保護者の理解が得られにくい。
	嘱託医との連携	健診時に発達面で気になることを相談。保護者の受診や専門機関へつなぐ。	・専門的な知識を得ることができる。 ・保護者が言うことを聞いてくれるようになった。 ・保護者との関係が保たれる。	・専門外の分野は判断がつきにくい。
	民生委員、自治会長との連携	園内行事に参加してもらい、地域での見守りが必要な家庭については情報を共有。	・地域の方に園のことを知ってもらう機会。 ・就労などを含め、地域での家庭の様子を知ることができる。	・地域外の家家庭にとってはあまり意味がない。 ・民生委員などに限らず、対象を地域住民に広げたらどうか。
	その他の専門機関との連携	対象児の情報の共有を図り、必要があればケース会議を実施する。また、日々の保育への助言などをもらう。	・専門的な知識を得ることができる。 ・保護者の協力を得やすくなった。 ・保護者との関係が保たれる。	・保護者を介したやり取りとなるため、本当に聞きたいことが聞きづらい。 ・保育園では困難な対応を求められることがある。

を認識して日々の保育に取り組んでいるだろうか。今回の意識調査の結果、やはり認識不足の職員もあり、個人差が大きいことがわかった。そこで、保育所長が職員一人ひとりと面接を行い、それぞれの連携についての意見を聞くと同時に、それに対するフィードバックを行うこととした。

② 職員間での見直し

日々の保育が専門性を発揮した保育実践となるよう、取り組みの意義や課題について、職員間で一つひとつ丁寧に話し合い、地域と保育所の特性を考慮しながら見直しを行った。その結果、全職員で意識の共有を図ることができ、新たな取り組みについて意欲が活性化し、次に示すような具体的な提案が行われた。

③ 新たな子育て支援の取り組み

上記の取り組みを通して、本園では多様な人や機関とネットワークを形成しながら保育を行っているが、保護者との協働に関しての取り組みが弱いことに気がついた。本園の保育は子ども主体であることを大切にしているが、子どもの気持ちの代弁を最優先してきたことが、一方で保護者の思いに寄り添うことに弱いという一面につながってしまっていた。しかし、職員間の見直しを通して、保護者は子どもの発達を支える役割を最も直

接的に担っている存在であり、子育て支援のネットワークの中心に据える必要があることを再確認した。子どもの乳幼児期に保護者が養育の指針を得るとともに、主体的にさまざまな機関や制度を活用する視点を備えられるような支援をすることが、保育所には求められている。そのような保護者の力を育成するために、本園では、親の意向を丁寧に聴き取り、その親子に即して柔軟に支援していくこととした。そのためには多様な取り組みが必要であり、今後、①育児講座（公民館などで保育士による育児講座や、楽しく身体を動かす親子遊びの実施。栄養士からのアドバイスなど）、②パパママ1日保育士体験（保護者が保育士体験を行うことで、子どもの育ちを確認すると同時に育児相談を実施）、③イクメン養成（既存のおやじの会を活用し、父親ならではのダイナミックな遊びや制作活動の実施。保育士による父親向け育児講座の実施）、④ティータイム（お迎えの保護者を対象に手作りのお菓子やお茶を出し、ホッと落ち着ける場や保護者同士の関わりの場を提供）など、保護者と協働する場面を創出するための具体的な実施案を職員全員で考えた。

④ 今後の課題 一説明力の向上—

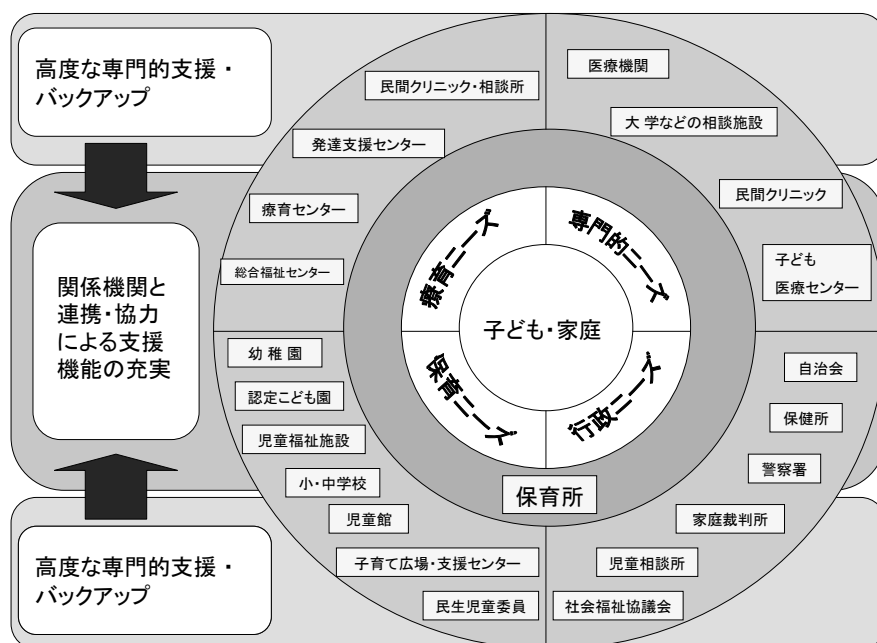
今回の取り組みを行って強く感じたことは、今

後の保育所には、保育実践を振り返って、今まで積み上げてきたことや保育をきちんと説明できる力量を持つことが大切だということだ。これは、ネットワークの中で他の関係機関と対等な関係を築く上でもとても重要なことと考える。保育所は地域社会に最も身近な児童福祉施設として、要保護児童地域対策協議会などのネットワークに参画することや日常活動の中で行政や小学校、民生児童委員、町内会などとの連携を深めることが求められている。その上で、一番大切なことは、それぞれの機関が単独でできることには限界があることを認識し、ネットワークで情報を共有することである。これができれば、保育所を含めた各機関が役割を分担して支援を行うことができると考える。そのためにも、まずは、他機関から認められるような専門性を発揮していくことが重要である。

IV. 考察 一子ども・子育て支援における保育所の役割一

上記の検討をもとに、多様な子ども・子育て支援の展開と関係機関との連携についてのネットワークを図に整理したものが、「図1 子ども・子育て支援ネットワーク図」である。この図では、ニーズを「保育ニーズ」「療育ニーズ」「専門的ニーズ」「行政ニーズ」の4つに区分している。さらに子どもと家庭との日常的な関係を中心部に置き、これを高度な専門性が上下から挟んでいる。つまり子どもと家庭に最も身近な保育所が、子どもと家庭の多様なニーズに真っ先に気づき、各専門機関に橋渡しをする役割を担っていることを示している。保育所は専門機関とのネットワークを形成することに加えて、子どもと家庭のニーズを迅速にキャッチし、的確に専門機関につなげることができる専門性が期待されている。

図1 子ども・子育て支援ネットワーク図



V. 結論

本園での保育実践に対する職員の意識調査結果をもとに、子どもや保護者が安心して過ごせる子育て支援のあり方と保育所の役割を考えてきた。さまざまな人や機関とのネットワークの中で対等な関係を築くために、保育所は今までのように他の専門機関からスーパービジョンを受けるだけでなく、保育所側から積極的に情報を提供していく必要がある。そして、その際には勘や経験ではなく、保育所で行っている個別的な保育の配慮や工夫（質の高い保育）を専門知識や理論とあわせて、確信を持って伝えていくことが重要である。少子化・核家族化の進行とともに地域住民のつながりの希薄化が進む中、保育所は、子育て文化の発信拠点として、地域の人びとの関わりによって子どもの育ちを支え、社会全体で子どもを豊かに育てる環境づくりを進めていく役割を有していると言えるのではないだろうか。

＜謝辞＞

本研究にあたり、日本社会事業大学、金子恵美准教授に貴重なご意見を戴いた。また、快く協力を承諾下さった朝日保育園の保育者の方々に心からお礼を申し上げる。

参考文献

- 1) 全国社会福祉協議会（2011）「第4章第3節地域子育て家庭への支援〈実際例を含む〉」「第5節子育て家庭支援における関係機関との連携〈実際例を含む〉」「家庭支援論／家庭支援と保育相談支援」『新保育士養成講座第10巻』全国社会福祉協議会出版部
- 2) 大橋和久（2012）「ぜんぽきょう」No.225pp.15、No.226pp.2、No.229pp.6、No.231pp.10
全国社会福祉協議会、全国保育協議会
- 3) 三浦幸子（1994）『幼稚園・保育所と専門療育機関の連携について』立教女学院大学紀要 26